

## 『ウィーンの森の物語』の外

倉 田 稔

### 序

学生食堂 子供たち クラスで 映画 夕食会 刺抜き ミリー 女同僚 国際 日本人会  
「カフェ・ツェントラール」 夕方 クロウタドリ 談話=雑 社会奉仕部

### 序

私は、1990-91年のウィーン留学が終って、「ウィーンの森の物語」という原稿を書き始めた。200字で1,870枚となった。その後、日本放送協会出版でこれを出版することになった。それで私は、この草稿は長すぎると思って、約半分に短縮した。これを原稿と呼んでおく。出版した『ウィーンの森の物語』（NHK ブックス）は、200字でおよそ1,000枚くらいだが、原稿の全部が本には入らなかった。入らなかった部分を、全部ではないが、ここで引き抜いておく。前後関係が脱落していて、理解しにくいかもしれない。また、私が入れなかったものと、出版社が入れなかったものがある。

本書には欠点があるらしい。真鍋さんによれば、当時の首相フランツキーはユダヤ人ではなく、国民投票は本書で描いたよりも民主主義的な手続きで行われる、と。上条氏によると、その後、オーストリアはEUに加入した。

ここで登場する人はこうだ。クルトは私の友人である。オーマは「お祖母さん」という意味であり、彼の母である。ジョイは彼の妻、ライラは二人の娘、ヤンはオランダ人でクルトの友人である。ミリーはピアノの家庭教師である。

### 学生食堂

メンザという安い食堂がウィーン市内にいくつかある。セルフ・サービスの食堂である。学生寮もこの食堂を持っているところがある。その日の定食が毎日数種類ある。ある日、ウィーン大学食堂で食べたのは、何とチーズのフライだった。ジョイに質問すると、「そんな料理は聞いたことがない」と言う。ただし、スープ付きで21 シリング (270 円) というものであった。「大学食堂では安い油を使っているので、一年食べ続けていたら胃に穴があいた」と冗談を言った人がいる。

### 子供たち

クルトは、「この小学校では、少年たちが少女にたいして攻撃的で、先生を尊敬していない。インテリが多いのに」と嘆く。彼は、「医者や会社の経営者が子どもに、先生は偉くないと言っているからだ」と分析する。

ライラは、いい成績をもらってきた。数学の2（優）を除いて全部1（秀）だ。「これをもって中学に行ける」と、かわいい。「そういうのは稀だろう」と聞くと、クルトは「こういう成績は皆もらう」といい、ジョイは「クラスでトップだ」と言う。こうなると分からない。小学校では女

子のほうが成績が良いらしい。

### クラスで

ドイツ語学校で私がスピーチをした。オーストリアの経済学者ヒルファディングの話である。リーザ先生はヒルファディングを知らなかった。それで私は皮肉を言った。「僕は外国人なのに知っている。貴方はオーストリア人なのに知らないとは。」「だから、さっきから、こんなに小さくなっているの。」

### 映画

ある夕方、クルト、ジョイ、私で、映画館へ行った。隣の座席にいた観客が、「日本人がハリウッドの映画会社を買った」という話をしていた。ちなみにオーストリアでは映画は作らない。あるいは映画会社がないとあってよい。さて映画館の席は、いろいろであり、列によって値段が違う。また映画館には喫茶・スナックがある。だから終ってから、ここでビールを飲んだ。我々は、当時評判だった「フレッシュマン」を見た。わざとドイツ語版を選んだのだが、本来の版は英語だろう。もちろん英語版の映画も他で上映している。

後日私は、映画「狼と踊れ」も見に行った。年一番の評判の映画であった。ただし、18才以下お断りであった。あとで聞くと、映画の中で若い女性が裸でベッドに入るところがあるからだ。

昔、大島渚監督が阿部定事件を扱った映画『愛のコリーダ』（オーストリアでは題名が違って、『道徳の領域』）が評判になった。これを日本の友人達と見に行った。なぜなら、「日本では重要場面がカットされた」という話を聞いたからである。この映画は現実の話を少しデフォルメしたものである。これについてオーストリアの友人たちの反応は面白かった。「日本人のイチモツはあんなに黒いのか」、「日本人はあれほど暇なのか、毎日あれほど頻繁にセックスをしているのか」というものであった。

### 夕食会

家で夕食会があり、ジョイの友人の二家族が来た。会社での旧友人夫妻、そして元看護婦長のオーストリア人とその夫である。全員ウィーン人で、皆、年金生活者だ。日本語の話から始めて、一老人のジョークの展開となる。私も負けじと三つほどジョークを披露した。「ある女性オペラ歌手がオペラを演じたが、彼女はあまりほっそりしているわけではなかった。劇で相手を抱きしめようとしたが、手が相手に届かなかった」という、たわいのないジョークである。その後、政治論議になった。これは内容が細かすぎて、私は加われないのが残念だ。

最近テレビでコントを見ると、先月よりもよく分かった。私のドイツ語の理解力が進歩したという実感である。ただし政治の戯画は分からなかった。近代国家では、政治家を戯画化するとされる。オーストリア大統領ワルトハイム、首相フラニツキー、副首相リーガーらのそっくり人形が、テレビで喋っている。家族の者は大笑いをしている。私はオーストリアの政治は、新聞に載る大きい事件しか分からないので、笑えない。クルトは、「言葉の問題と情報の問題とが二つあるから、こういうものは外国人にはむずかしい。しかし二年くらいオーストリアにいれば、分かるようになるよ。」残念ながら私は、今回は十カ月しかいられないのだ。

## 刺抜き

クルトの母がサボテンのとげを指に刺した。「痛い。これでは何もできない」と言っている。しかしクルトは「気を付けなければ駄目だよ」、ジョイは「手袋をはめてやるべきだったね」と言うだけで、そのままである。だから私は見かねて、日本から刺抜きを送って貰うことにした。二、三日後、皆のいる処でクルトの母に、刺はとれましたかという、「とれない」と言う。クルトに言う、「じゃ抜こう」と言うことになり、彼は針で抜いた。血が少し出た。何日か後、航空便で、注文の刺抜きが届いたので、彼女に、「日本から刺抜きが来た。貴方にあげます。刺抜きはあるのですか？」と言うと、「刺抜きはある」と言う。それで結局渡さずに終わったが、変だな、それではあの時なぜ刺抜きを使わなかったのか。そこでライラに「ウィーンでは刺抜きがあるの、どういうもの？」と聞いたら、「こういうものよ」と言って私に見せたが、ピン・セットだった。

## ミリー

ある日の夕食に私が焼き飯を作った。ミリーが来た。ジョイはいない。私はクルトがまだ会社から帰っていないと思い込んで、ライラ、彼女と三人で、楽しく食事をした。だが彼は母の所にいたのだった。「何で僕を呼ばないのだ」とクルトは不満である。ミリーは美人である。化粧のせいかもしれないが、きれいな目をして可愛い鼻をしている。

クルトがミリーを送って帰ってきた。「車で送る途中、ミリーは君のことを愛らしいと云ったぜ。だから、どう、彼女と結婚しない？」とクルト。しかしまあ、有難いことではある。ああいう可愛い女性とは結婚したいものであるが、毎日パンとソーセージを与えられるだけでは困るので、断った。ジョイは言った。「ミリーはかつて斜視だった。それが手術をして直った。それで彼女は美人になったのよ。」クルトは、「ミリーは旦那を抑圧しているのではないか。実際の生活は他人は分からないが」と言う。ジョイが言う、「彼女は昔は謙虚で控え目だった。今はドイツ女より強いわ」。

## 女同僚

二月のある夕方、ジョイと同じ工場で働く、フィリピン女性Pさんが来た。17年もオーストリアのブルゲンランドに住んでいる。それもハンガリー国境だ。その嫁ぎ先の親が、83才で、農業を営んでいる。彼女はウィーンで部屋を借りているが、週末だけそこへ帰る。その舅は、妻に死なれ、女友達がいる。さらに彼はポルノ雑誌を講読し、Pさんが風呂に入っている時、彼女の裸をよく眺めるのだそうだ。「ブルゲンランドの家が狭く、息子は台所に寝ている。だからウィーンで住宅を求めたいが、住宅難だわ」と彼女は言う。「しかし子供が二人いれば、公共住宅が必ずあたる」とクルトは応ずる。

Pさんは、「私のフィリピンの父親は、日本軍属の通訳をしていたので、日本語がペラペラだ」と私に言う。彼女は目の周りに黒く線をひき、大変な化粧をしているので、夕方歩いていたら男に迫られた。彼女はミンクの毛皮も買った。本当は5万シリングするが、古物なので安かった。何と、たった1万8千シリングだった。それを会社に着て行くのである。彼女は我々の家に泊まって行き、翌朝、お化粧に30分もかけている。

Pさんが出かけてから、クルトは、「彼女は気が違ってるよ。ミンクは、大会社の役員が車でオペラでもゆく時に着るのであって、工場へ着てゆく必要はない。労働者だぜ、何か月分もの月給をミンクに使っている。彼女は元はフィリピンではディスコの踊り子で、教育もろくにない」と。

朝食でジョイが、話をする。例のミンクのコートを買った女性は、やはりそれを売りたいそう  
だ。「生活方法が、ヤンは極端だし、ミンク女性も極端だし、我々はまん中だ」とクルト。

あるパーティーに、Pさんが、犬をつれた夫と共にやってきた。よく聞くと、実際は結婚して  
いないようで、つまり同棲である。彼らはブルゲンランドに住んでいる。夫は「美しいカール」  
と呼ばれているが、美しくないのです、これは皮肉だろう。つまりあだ名である。彼の商売は印刷  
屋である。彼女は男の子を二人持っている。上の子はウィーンの五年制のコンピューター学校に  
通っていて、カールの子ではない。下の子は古典中学に通っている。成績が悪いが入れたのだっ  
た。これは需給の関係であり、地方の古典中学だったから、空きがあったのである。この下の子  
はカールの子である。だから彼女は以前に、彼以外に恋人か夫がいたのである。この子たちはや  
はり人に会っても握手をしないから、オーストリア的ではない。

## 国際

オーストリアは国際的国家だから、外国人を一応はよく受け入れる。クルトは言う。「オースト  
リア人は、どこの国の人も受け入れるとしても、実は黒人だけは結局受け入れない。」「どうし  
て?」「色が黒いからだそうだ。」これは庶民の考えである。「それはまた日本と同じだね。」クル  
トは言う。「一体、オーストリア人なんていない。田舎はともかく、ウィーンには少ない。外国人  
ばかりだ。うちにしても、ライラだって純粹のオーストリア人とは言えない。」

## 日本人会

ウィーンに日本人会という会がある。どの外国にもあるだろう。私は以前は入らなかったが、  
今回は入会してみた。オーストリア在住日本人の会である。

四月にその総会があるというので、出かけた。山田洋次監督、渥美清主演の「寅さん」を上映  
した。これはすでに国民的な映画になっている。外国にあるどの国の日本人会も、年一度新年会  
か総会をするのだが、なにしろ必ずそこで「寅さん」が上映されるのだから。映画が終って総会  
が行われた。偶然そこで、Rさんと一緒になる。「役員が前もって決まっています、投票で決まるの  
ではないんですね」と彼は感心? していた。

## 「カフェ・ツェントラール」

ドイツ語クラスで、古い有名なカフェ「カフェ・ツェントラール」へ行った。このカフェの入口  
にはペーター・アルテンベルクの座像がある。担任のエリカ先生は、「この喫茶店でトロツキー  
が、革命の計画を練っていた」と言う。級友アレクと隣になったので、彼と反ユダヤ主義の話  
をする。トロツキーが、本名であるブロンシュテイン (=ユダヤ名) を捨てたのは、反ユダヤ主義  
があったからだという彼の説は面白い。反ユダヤ主義のために、ユダヤ名をロシア名に代えた  
と言うのである。かの水爆の父サハロフ博士もそうであり、本名はユダヤ名であると。プハーリン  
もユダヤ人だと言う。

## 夕方

我々は、レストランから帰って、お喋りをする。「半年女を抱いていないよ、この日本人は。考  
えられない」とクルト。ヤンは「昔、ギェルテル (=ウィーンの外側の環状道路) で売春婦の友  
達とただで寝させてもらった。僕は今はインポだよ。昔、野豚としたら、折れちゃったから。」ま

た言う、「家の近くの幼稚園で、頼まれて室内に家の模型を作ったら、約束と違って金を払わなかった。だから作った物にペンキを塗りたくってやった」。彼は、クルトの家にあった仏の顔を複製していくつか作った。そしてこれをお土産にもってきた。「これを売ったら」とクルトは提案する。

「ポルノグラフィーを見せる」とヤンが言う。オランダのポルノは綺麗なもので、私は期待したら、何と光電子学の本だった。冗談がうまい。「どこがポルノ？」クルトは、「ヤンは、これを見て絶頂に達するんじゃない？」とうまい冗談を言う。

「ヤンは、無神経だ」と、後でクルトが言う。鍵がないと二階から飛び降りたり、裸で庭に出たりするそうだ。「オランダ人はこんな風だ」とクルトがいう。例えば「僕の従兄弟がもうすぐガンで死にそうだ」と言うと、「人間は死ぬものだ」とヤンが言ったという。もっともオランダ人だって色々いると私は思う。

そこへベルが鳴った。わが家に、ライラの友だちであるシュテフィの両親が来て、皆で庭へ出てお茶を飲む。夫人はよく喋る人だが、夫君は寡黙である。庭では外気がかなり寒いですが、皆は「快適だ」という。そのまま皆でF通りのホイリゲに行く。

クルトが言う。「ヤンはすべて権威を無視する。その心を毎日鍛えている。習慣も無視する。」ヤンはインドで一種の仏教を学び、その影響を受けているのだ。クルト、ジョイ、私は、鳥のフライを注文した。鳥のグリルは品切れだということからである。同じ鳥なのに、ないと奇妙だ。これを食べながらクルトは、「非常においしい」と言う。ヤンは「しかし毎日食べたたらたまらない」と。彼は空腹なので、すぐ自分のを食べ、クルトのを盗もうとする、尤も半分は本気ではない。

子どもたちが遊びに飽きたようだった。だから夫人は子供たちに言った。「ここに来ているお客の皆に、『今度、ワルトハイムがまた大統領候補になれるか』と聞いてまわったら」と。この冗談が妙にまともに感じられてしまったので、大人たちは、「こんどまたなれるかねえ」などと、つい話しこんでしまった。ついで夫人は、近くの小ぶとりの男性を見て、「彼の職業は何か当てっこをしよう」と、皆に言ったりする。

## クロウタドリ

四月初めだった。「鳥が、母の庭にきれいに巣を作った。完璧な円形の巣だよ、すごいわよ。明日見せる」とジョイが言う。数日後、ジョイが庭から、「来てみて」と言う。例の鳥の巣だ。それはクロウタドリ（つぐみの一種）だという。からだ全体が黒く、くちばしが長くて黒い。鳥は巣にうずくまっていて、母ベテイ、ジョイ、私が、見に行っても逃げないのである。卵を温めているからである。「卵の色は紫色だった」とライラは言う。後でまた見に行くと、鳥の巣に二つ、緑色の卵が入っていた。庭には鳥のオスとメスがいます。オスは、くちばしが黄色い。だから先ほど見たのはメスである。

その後、鳥がまた二つ卵を生んだ。これで四つになった。クルトが見に行くと、鳥が飛行機のように飛んできて、巣の上を覆った。ジョイは、「他の母が生んだのではないの？」というので、私は「いや、この鳥は浮気をしていないよ」と言った。ある日、帰宅すると、鳥のヒナが四羽かえった。「父親鳥が、一生懸命、虫を運んでいる」とクルト。

数日後、食事の最中に、ライラが急に泣き出した。大粒の涙である。何かと思うと、「鳥のヒナがいなくなった」と言うのだ。誰かが、「猫にでも食べられたのだろうか」と慰める。ところがこれが慰めにならないのだ。そのことを、かわいそうに思っているからである。それでまた大粒の涙、涙である。皆がまた慰める。私は、「飛んで行ったのだろうか」と慰めを言う。クルトは生物循環論

を語る。「猫か、いたちに、食べられただろう。ヒナは羽根がないから飛べない。それに、巢が低すぎた」と言う。

その後、ベティは、ひそかにクルトに、「クrouタドリは、庭に沢山いるから、十分だ」と言ったという。クルトは「それは私が語ったのではないよ、母だよ。母は無神経な言葉を言った」と。

## 談話＝雑

私は自分の屋根裏部屋から、いつもわが家の庭を見ている。庭には、クリムトが描いたような木が数本立っている。夕陽を浴びると特に、その絵のようになる。木の中心部にある葉が黄色で、外側の葉は緑である。だからクリムトは架空の景色を描いたのではなかったのである。だが十月末になると、そのクリムト的な庭の木は全部黄色になってしまう。

四月の庭に杏の花が咲いている。白い桜のような花だ。最近朝はほぼ10度になるので有難い。スーパーで、シャンペンなどを買う。クルトの誕生日を今日お祝いをするのでジョイが言っていたからである。「ところで今年の夏は、我々はオランダへ休暇で行く。一緒に来ないか」と私を誘った。残念ながら行けそうもない。

ジョイが言う、「私は何でも、例えば食べ物を人にあげるが、利己的な人がいて、貰うだけぐれない人がある。」クルト、「自己中心主義の近代的発展なんだ。」ジョイは、「何でも人に与えてしまう、ハートであげてしまい、頭で考えない」と。クルトは「僕は、先ず頭で考えてから、人にあげる」と。しかしジョイは、「そういう場合、違った人からもっとすごい物をいつもプレゼントされる。そのようなラッキーなことはしばしば起きている」と言う。

今日も職場のユーゴスラヴィア女性が、自分の息子が生まれたお祝いに、大きいチョコ・トルテをもってきた。職場に同僚が20人もいたから大変だった。彼女の夫が、病気で職場をやめ、彼女は女手一つで子供を育てている。ジョイはそこで、すぐ百シリング(1,300円)をプレゼントしたとかである。

クルトは私に、「君のクラスじゃ、先生へのお別れプレゼントの60シリングが高いと、不平を云っていた人がいたようだけど」と、皮肉をいう。また「日本人は義理で人に与えるよね」とクルトが言う。

四月一七日は、0度になった。「オーバーを着て行ったほうがよい」とクルトが忠告する。「風邪をひく人がふえて、葉が売れて、私はうれしい」と。私も、「父が銀行員だったので、デフレの時は喜んでいた」と言った。

かつて手術が終わった時、ジョイは、「夫とのフェアケア(交通・交わり)は駄目ですよ」と医者に言われ、夫とのドライブはだめなのか、どうしてかと思ったというので、皆大笑いであった。

クルトは、「僕がもし一人息子でなかったら、オーストラリアに住みたかった」と言う。「我々が別れたら、この二つの家で別々に住もう」と、二人が冗談をいう。クルトは言う、「離婚は争いだ、戦いだ、シリングを求めて闘う。相続争いは深刻だ、どこでも喧嘩になる、インタナショナルだ。しかし、ジョイは、親の遺産を分ける時、財産をとらずに、遺産を兄弟姉妹に譲ったんだ。」

私はあるウィーン婦人が言ったことを思いだして、我々の住んでいる「13区は金持ちだそうですね」とオーマに言うと、「オーストリア人の10%は負債をしょっている」と答える。「ここ13区に住んでいても、皆クレジット(=ローン)を払っている」とクルト。

「ホテル・ザッハー」の主人が自殺したというニュースが流れた時、ジョイは私に、『クローネ

ン・ツァイツング』をを買って来てと、頼んだ。「なぜその新聞を買うの？」と聞くと、「こういう類の話が一番詳しいから」という返事だった。

「ウィーンのあるスーパーのレジ係の女性が、昼の一時の勘定の中にチョコレートを食べている。だから太っている。」とクルトが言う。「ある太った女性が地下鉄に乗り込み、汗をふきふき座り、バッグからコーラを出して飲んだ。工場で、おやつにチョコレートが出る」と、ジョイが言う。

### 社会奉仕部

家の近くに、社会奉仕という部がある。何をするのか分からない。ここである時、蚤の市をやっていた。なかなかよい本があったので、買った。ある時、この社会奉仕部の車に、すごい大きなライトがついていた。クルトは、「そんなの必要ない、自分の業務に意義があると思っているからだ。たいした事はやっていないのに。」